

# 戦後におけるわが国経済のうつりかわり

—— 外から眺めた日本 ——

行政管理庁  
統計基準部長 美濃部亮吉

## まえがき

昭和21年12月に統計委員会の事務局長に就任してから早いもので10年余の月日が流れ去った。10年の月日を顧みて、不愉快な事件もないではないが、たのしい思い出の方がずっと多い。役徳といつてはごへいがあるかも知れないが、統計に関する国際会議に出席するために、世界のあちこちを訪れる機会を得たことも、そうしたたのしい思い出の一つに数えられる。国際統計協会の総会に出席するために、1949年にスイスのベルン、51年にインドのニューデリー、53年にイタリアのローマ、55年にブラジルのリオ・デジャネロを訪れた。それ以外に1950年にはワシントンに、51年にビルマのラングーンに、52年にカナダのオタワに行つた。合計すると7回になるから外国を訪れた回数からいえば多い方に数えてよいだろう。日本を離れて外国に行つて外国の社会に接すると、いつもは気がつかない日本の長所や欠点がよく見えるような気がする。数度の外国の旅から日本を眺めて目象深く頭に残っていることをまとめて見たのがつぎの一文である。

戦争直後の1947年戦争中乱れに乱れた日本の統計を建てなおすために、アメリカの統計基準部長のステュアート・A・ライス博士を団長とする統計使節団がマックアーサー元帥によつて招ねかれた。

ライス博士はいろいろと親身に私たちに指導し援助し下さつたが、わが国の統計のおくれをとり戻すためには外国の統計界とできるだけ早く接触を保つ必要がある。それにはちようどよい具合に1949年にスイスのベルンで国際統計協会の総会が開かれるからそれに出席して外国の統計学者と話し合うのがよい。この総会に日本の代表者が出席できるようにできるだけの尽力をしようと約束して帰られた。

ライス博士はこの約束を覚えておられてマックアーサーに直接に手紙を出されたのだそうである。その結果思いがけずまだ戦後の混乱も治り切つていない1949年に外国に行くことができるようになったのである。

行く話が決つたのは出発の2週間前位だつたとおぼえている。日本はまだ独立していない時分だつたから外国旅行に伴う手続きはすべてアメリカさん相手にしなければ

ばならない。

G・H・Qの統計部の方々は、出発に間に合うようにいろいろと援助して下さつたけれども、日本人はまだあまり外国は行つていないころのこととてなかなかちがひがあかない。

飛行機は午後1時に出発するというのにその日の朝までアメリカのヴィザがとれなかつた。出発の日の朝早く横浜のアメリカ領事館に行つて漸くヴィザをもらい大急ぎで飛行場にかけてつけるという始末であつた。なにからなにまでほとんどすべてのことをツウリスト・ビュローでやつてくれ本人は出発の日までゆうゆう仕事をされているこのごろとは文字どおり雲泥のちがひがあつた。

## 古靴はいてスイスへ行く

1949年といえは昭和24年であり、わが国の経済も漸く復興の緒についたばかりのころであつた。産業活動の指数は戦前を100として漸く76.7というところ戦争直後の飢餓の状態は漸く脱却した、がまだなにもかも足りないものだらけの時である。

パンも黒くコーヒーも自由に飲むことはできず砂糖にも不足していた。洋服や靴も外国に行くために新調するというわけには到底いかなかつた。

私たち3人とも戦争前から持ちこしのくたびれた洋服にどうやら穴だけはあいていない古靴をはいて出かけざるをえない有様であつた。

飛行機はノース・ウエスト・エアーラインである。イギリスのヴィザがどうしてももらえないため印度経由で行くことができず、アメリカを通り大西洋を渡つて飛ばなければならなかつた。国破れて山河だけ残された日本を出ると見るもの聞くもの何一つとして驚異の種でないものはなかつた。

飛行機に乗つてまず驚嘆したのは食事のおいしいことである。目にしみるように白いパンは口に入れるのがおもしろいと思うほどであつた。コーヒーを何杯でもおかわりできるとはなんとというぜいたくさであろう。そのコーヒーにたつぷり砂糖を入れて充分甘くして飲んだときには久しぶりで昔の文化生活に接したような気がした。出て来る肉や魚や野菜のおいしかつたことは今でもおぼえて

いる。

その後何回も外国に行く機会があつた。飛行機のなかの食事がだんだんまづくなつてきたように感じられる。パンの白いのにも感激をおぼえなくなつた。コーヒーも銀座で飲んだ方がおいしい。冷凍した肉や野菜や魚の料理も新鮮味が足りなくて一向においしくない。

このごろでは飛行機に乗る前には、また2~3回あのみづい料理を食べなければならないのかとうんざりした思いを抱くようにさえなつた。たしかに1949年以後の日本の国民の食生活は急速度に改善されている。

1949年にはこんな食事をおしげもなくサービスするアメリカの航空会社の豪華さに心からせん望の念を抱かざるをえなかつた。昨年南米へ行つた時には往復ともに日本航空の飛行機を利用した。旅費が充分でないのでツーリストクラスで旅行した。それでも飛行機のなかの食事はほかの会社に負けないほどのすばらしさだつた。

サンフランシスコを出ると、間もなくまぐろのおすしが出る。晩飯はおにしめの御馳走だつた。1949年に旅行した時には、6年後に日本の航空会社の飛行機のなかでこんな御馳走にありつけようとは思ひもよらなかつた。

### 荒廃になれた眼とスイスの自然

飛行機の故障で約10時間おくれ、アメリカの上空を飛んだのは真夜中のことであつた。夜の空から眺めたアメリカの都会の美しさはお伽話のなかにでてくるアリスの魔法の国かと思うばかりである。何よりも驚嘆したのは電灯の明るいことで白い火、赤い火、青い火が光り輝いているアメリカの都会を夜空から眺めると、月並みな形容ではあるが高価な宝石を一面におちまけたように美しかつた。

そのころの東京はこのごろのようにネオンが美しく輝いてはいなかつた。冬などは電力節約でネオンは消え家庭の電灯さえ消えがちであつた。そんな東京から1昼夜たらずで繁栄の国アメリカに来たのだから、こんなにびつくりしてしまつたのも無理のないことかも知れない。

それにしても、このごろの銀座のネオンの華やかさは世界のどこの首都と比較しても決してひけをとるまい。フランスのパリーは知らないが、そのほかの国々とくらべて私の知っている限りでは、銀座のネオンはニューヨークのブロードウェイについて華やかである。

3晩4日ほどでスイスのベルンに到着した。混乱がまだすつかり治っていない日本から来た私たちには、スイスは文字通り天国のように思われた。みどりの牧場も目にしみるばかりに美しかつたし、千古の雪をいただくアルプスの山々もこの上なく美しかつた。美しいアルプスを眺めながら、豪華なホテルのヴェランダに坐つて舌のとろけるように甘いジャムを真白いパンにつけて朝食していると、この世の中にこんなにあつた生活はまだ残

つていたのかと思つたほどであつた。

戦争中に儲けたお金で、豪華なアパートが所々方々で建築中であつた。住宅事情の悪い日本から来た私たちには、こういう美しいアパートが何にもまして羨しい。私たちは相談して、いくらスイスだつて貧乏人もあるだろうし、貧民くつもあるにちがいない。

一つそういう汚い所を見てやろうではないかということになりホテルのボーイさんにベルンにもスラム街(貧民くつ)はあるだろうかと尋ねたらそりあ勿論ありますという返事だつた。そこでそこへ行く道を教えてもらつて3人で出かけた。

そこはベルンの町のまんなかを流れている美しい河のほとりにあつた。来てみてびつくりしたことは、そこは2~3日前散歩に来て新築の豪華なアパートでなくてもせめてこの位の家に住みたいものだと思つていたところである。

食べ物やネオンなどの点では、このごろでは外国に行つても少しもひげ目を感じない。それどころか、東京の銀座ほどネオンの光りに輝いているところはめつたにあるものではない。また外国に着いて2~3日すると日本の食べ物がいしくなる。日本ほど安くてうまいものが食べられる国はない。

しかしいつまでたつてもどんどん建築されてゆく外国の簡単でしかも美しいアパートは羨しい。日本の貧相なアパートのように洗濯物で満艦飾になつているアパートなどは一つもない。日本の復興のうちで一番おくらしているのは住宅であるらしい。

デパートに入つて何よりも目につくのはあたたかさうな下着類であつた。毛糸やウールで作られたシャツやズボン下が一番羨しかつた。お土産にはほかのものには目もくれずある限りのお金を暖い下着類に注いだ。そのころの日本の冬は恐るべき寒さであつた。煖房用の燃料はなく役所では1日中外套を着て勤務していたところであつた。家に帰つても厚着してこたつにもぐりこんでいる以外に寒さを凌ぐすべはなかつた。

だからこそほかのものには目もくれず、あたたかい下着にばかり飛びついた始末である。それにくらべれば今年の冬のあたたかさはこれが同じ東京の冬かと思うほどだ。役所の室にも大きいストーブが据えつけられて日中適度の暖さに保たれているし、家に帰つてもガスストーブをつければ充分暖を取れる。今年の冬は夏と全く同じように肩ぎりのランニングシャツ1枚で通すことができた。今度スイスに行つても下着ばかり買いこむようなことはしないにちがいない。

スイスに行つた翌年の1950年には、アメリカに行きワシントンで3ヶ月をすごした。スイスに行つてから僅か1ケ年しかたつていない。その1年間の復興が急速に進んだせいか、スイスに行つた時ほどには見るものきくも

のに驚嘆はしなかつたようにおぼえている。

しかしそのころの日本ではなかなか手に入らないものがたくさん店のショー・ウィンドーに並べてあつた。ことにナイロンやプラスチックの製品の美しさに目を奪われた。すき通るようなナイロンのブラウスも珍しかつたし、ウーリー・ナイロンの靴下もこの時に初めて見た。プラスチック製のレインコートをドラッグストアで買つて雨のワシントンを得意になつて歩いたこともあつた。ガラス箱よりもつと美しいプラスチック製の箱に入ったハンカチが、見た眼の美しさに比較して値段の安いのに驚いたこともある。

ある二世の家によばれていつたら、ろく音機をもつていてラジオ等の美しい音楽をろく音テープにおさめ、それを聞かせてくれた時には何という便利なものができているのだろうかとただ感心するばかりであつた。

少し大きさにいえばワシントンやニューヨークの店にかざつてある品物の大部分は日本にはないものだつたといえるかも知れない。

その後、アメリカには3度ほど行つた。去年は南米に行く道で4日をワシントンですごした。今ではワシントンの店に並んでいる品物で東京で手に入らないものはないといつてもよいだろう。5年か6年の間にナイロンもプラスチックの製品もみんな日本で生産されるようになった。この5～6年間の日本の工業の発展はまことにすばらしいといえるだろう。

### 眼みる貧窮の度と数字

ワシントンから東京に来てても習慣風俗のちがうアジアに来たという感じが一向にしない。またインドに暫らくいて東京に着くとアメリカに帰つたような気がする。…こういつたアメリカ人がいる。

この言葉には多分のお世辭がふくまれていると思われが真実な面もある。羽田をたつて1昼夜たらずでサンフランシスコに着くが、とくに外国に来たという感じはしない。しかしそれと同じ位の時間でビルマのラングーンやインドのカルカッタに着くと、恐ろしくちがつた国に来たという感じを抱かざるをえない。

ビルマのラングーンには1951年の2月に、インドにはおなじ年の12月に行つた。欧米の国々に行つた時には日本に生まれてよかつたという感じを抱くことは殆んどない。

しかしビルマやインドに行くくと日本に生れてしあわせであつた々とつくづく思う。なににもましてそういう感じを抱くようになる原因は、国民の生活水準がいかに低いからにちがいない。

1953年に日本の国民1人あたりの平均の所得は188ドルであつた。アメリカの国民1人あたりの所得は2,000ドルに近いのだからその差異はずいぶん大きい。日本のア

メリカのちがいは10倍以上であるが、表面に現れた国民の生活けそんなに大きいちがいはあるようには思われな

い。

インドの国民1人あたりの所得は1953年に59ドルであり、ビルマは43ドルであつた。日本との差異はアメリカとの間のちがいはほど大きくないが、日本の半分以上も低くなると貧窮も極度に激しくなりその間の差異は非常に大きいと感じるようになるのであろう。

ラングーンの町に入るとプーンといやな匂いが鼻をつく。これは道路の両側に所せましばかりに打ち並んだ屋台店から立ち上る食物の匂いである。油と食べものすえた匂いとがまじり合つてたえがたい異臭を發散する。夜になると往来にじかにたくさんの人が寝ている。町中終戦直後の上野地下道のような有様だ。といつたら少し大きくなるであらうか。

インドの状態もこれに劣らずひどい。カルカッタの中央停車場の前の広場の光景は、今でも忘れることができない。難民であらう。そこにはやせた人達が生きている人とも思えないような青い顔色をして、なにをするともなく1日中ねそべつていた。

インドのホテルに着くとあらゆる種類のボーイさんがサービスしてくれる。荷物を持つボーイさんは決して掃除をしてくれない。風呂を用意してくれるボーイさんはまた別の人である。靴はまた別のボーイさんでなければ磨いてくれない。

これはそれぞれの人は生れながらにそれぞれの身分に属してそれぞれの身分によつてなし得る職業の種類が厳格にきまつているからなのである。

いよいよ日本に帰る時になつてホテルの出口に向つた時のことである。1小隊ばかりのボーイさんが出口の両側に並び私は何をしたらはあれをしたといつて手を出す。みんなチップを要求しているのである。

ホテルの支関のこととしてほかのお客さんは面白そうに眺めているし、チップをやらない限りは通せんぼうをしてホテルからは一歩もそとに出さぬ気配さえただよわしている。仕方がないのでひとりびとりの手にチップを渡して漸く逃げ出すことができた。

この時はつくづく日本に生れた幸福を神に感謝したい気持になつた。

